

薬師如来因縁記 (真蔵院所蔵)

(表紙)

「 薬師如来因縁記 」

薬師如来尊軀因縁記

在昔陸奥会津の里伊藤修理大夫光重という人の家に奉置する所の尊像なり然るに光重は人皇八十六代四糸院の御代鎌倉の北条時氏郷の家に事てしこうして寵遇尤も渥く才文武を兼ね名世上に高しめて拔群の勇士なり然れども佞臣の讒を構ふるに遭て主君の命に逆い身を会津の草江兵庫の頭貞氏が家に遁る而して主君の赫怒猶未だ休まず仁治三年壬寅年八月六日に家族長崎弾正を遣して会津の里に逐む既に彼ここに臻して両陳相闘に及べり鎌倉方自り高工左近と云うもの進み寄て修理と組合て相殺死す矣して軍兵修理が首を取つて櫃に納れ齎し行きて鎌倉に帰らんと欲して斯の里に到り来れり倏忽として器盤石の如くして揺動すること能わず衆人周章惶怖して蓋を去つて之を見るに薬師如来の尊首巍々としてあり焉軍衆惘然たり議して鎌倉に訴う時氏公焉を怪み使を会津に遣す使修理が家に到つて彼れを見るに身命恙無し常に彼れ念持する所の薬師如来尊容のみ唯有つて御首を見上らず茲れ従りして国中感喜肝に銘し合邑之を聞きて驚歎せざると云うこと無し使于鎌倉に還りて宮中に言す時氏公不可思議と歎して于鎌倉に迎へんと欲して而して使を此の里に遣すこれより先斯の里の形辺左衛門尉一夕夢らく汝我が像をして此の処に安置せよと仏勅嚴密に光明赫奕し紫雲靄靄して天燈降り點す其の余の靈瑞も亦少からず誠なるかな経に曰く自身の光明熾然として無量無数無辺の世界を照曜し及至幽冥の衆生悉く開暁を蒙らんとしたまひしこと彼の夢の事を以て官に訴え里民力を勸せて此の処に於て一字を構りて安置し上らんと請ふ焉より官旨に任すなり茲に由つて御首を草堂に安置し合邑精修持念し晨昏香花供養す誠を瀝て信を凝らすものは祈願する所の事成弁せざると云うこと無し焉より然めて二十余年を経て後ち洪谷丹波感應掲つ焉たるに遭ひ長有阿闍梨及び遠近有信の人と力を勸せ工に命じて像軀を製ら令め尊首に合せて全容を成す其の像や慈容妙相奇好宛として神造に侔という爾しより来た近世僧修して雲暉輝を表わし華趺工を極む凡工の得て作す所に非

す復た梵宮龕室及び寺門僧舎に至るまで脩葺せずと云うことなし輪奐として一新なり今四百七十有余年を歴るに及んで毎月初八、十二の両日には瞻礼する者の繩々として絶へず蓋し像設威靈にして而も唐捐ならざるを以の故なり伝へ聞く会津に於ても亦新に尊首を製て像軀を合せて安奉せしむると矣て廣哉大なる哉是れ如来利物の方便なる者なり猶頼哉仏諸の有情諸根不具醜陋頑愚にして盲聾瘡癩癱瘓背偻白癩癩狂種々の病苦あいんに我名を聞き己らは諸根完具して諸の疾苦無からしめんと誓うこと豈に疑がいあらんや

明治卅四年九月廿七日火災に罹る堂宇、尊容灰燼となりて失せ給へぬ

備考

仁治三年 紀元一九〇二年

建長年間 紀元一九〇九—一九一五に長有阿闍梨

当寺開創す

昭和四十四年より七百二十年前

当山の身代り薬師如来と申奉るは行基菩薩の彫刻し給ふ

北条氏—鎌倉時代に栄えた幕府執権の家柄

1. 時政—義時—泰時—時氏

泰時は一二二四年叔父の時房を連署とし嗣子時氏を六波羅探題に任じて補佐させ

た

徳川氏の時代には会津の太守参勤交代の砌は使を走て燈料を献し武運長久の祈祷を捧て之を恒例となせりと云う

真蔵院 五井野観秀

昭和四十四年二月廿八日